改革に挑む高校に聞く！ 生徒に勧めたい教育をしている大学は？

受験生の大学選びに大きな影響を与える高校教員。彼らは今、大学教育のどこに注目しているのか。自校でも教育改革を進め、教育への感度が高い高校に話を聞いた。

高校名	山脇学園中学・高校 学習進路部長 高桑 浩一	関東学院中学・高校 校長 森田 祐二	静岡聖光学院中学・高校 副校長 田中 潤	北陸学院中学・高校 教頭 高柳 乃輔	岡山県立邑久（おく）高校 進路課 出射 恵	広島桜が丘高校 1学年主任 沖村 将彦
学校概要	▶**所在地**：東京都港区 ▶**種別**：全日制／普通科／女子校 ▶**生徒数**：1学年260～300人	▶**所在地**：神奈川県横浜市 ▶**種別**：全日制／普通科／共学 ▶**生徒数**：1学年250～300人	▶**所在地**：静岡県静岡市 ▶**種別**：全日制／普通科／男子校 ▶**生徒数**：1学年約80人	▶**所在地**：石川県金沢市 ▶**種別**：全日制／普通科／共学 ▶**生徒数**：1学年320～350人	▶**所在地**：岡山県瀬戸内市 ▶**種別**：全日制／普通科、生活ビジネス科／共学 ▶**生徒数**：1学年約120人	▶**所在地**：広島県広島市 ▶**種別**：全日制／普通科／共学 ▶**生徒数**：1学年240～300人
主な進学先・利用入試	▶**進学状況**：東京海洋大、東京都立大、横浜市立大、早稲田大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、青山学院大、立教大、法政大、東京農業大、芝浦工業大、日本女子大、昭和女子大など　▶**利用入試**：（文系）一般8割／年内2割　（理系）一般7割／年内3割	▶**進学状況**：横浜国立大、横浜市立大、慶應義塾大、早稲田大、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、東京農業大、北里大、昭和薬科大、聖マリアンナ医科大など　▶**利用入試**：一般6割／年内4割（指定校推薦が1～2割）	▶**進学状況**：東京工業大、筑波大、静岡大、信州大、静岡県立大、早稲田大、東京理科大、明治大、青山学院大、立教大、中央大、法政大、東邦大、帝京大（医）、立命館大など ▶**利用入試**：一般6～7割／年内3～4割	▶**進学状況**：金沢大、富山大、北陸学院大、同志社大、関西学院大、国際基督教大、明治学院大、東京女子大、同志社女子大、金沢工大、北陸大、関西外国語大、中京大、関西大、芝浦工業大などほか短期大学5%、専門学校15%▶**利用入試**：一般2割／年内8割（学校推薦型選抜が5割以上）	▶**進学状況**：［普通科］立命館大、関西外国語大、近畿大、関西福祉大、岡山商科大、岡山理科大、川崎医療福祉大、環太平洋大など　ほか専門学校7割強 ［生活ビジネス科］専門学校7割、就職3割 ▶**利用入試**：年内10割	▶**進学状況**：広島修道大、広島国際大、安田女子大、広島経済大、広島工業大、広島文教大、比治山大、広島文化学園大、広島都市学園大、関西大、京都産業大、ものつくり大など　ほか専門学校4割、就職3割 ▶**利用入試**：一般1割／年内9割
自校の改革と成果	**中学段階から科学教育重視** ▶教育方針は「志の教育」。生徒の進路の可能性を広げるため、中学段階から英語と理系教育に力を入れる教育改革を2010年から実施中。中学1・2年次に「サイエンティストの時間」で研究の方法論を学ぶ。情報分野では、ネットワークに常時接続するマイクロコンピュータ「obniz」を使用し、ネットワークを使用したモノづくりを学ぶ。高校からはサイエンスクラスがあり、自分の研究に打ち込み、その成果を学会やコンテストなどで発表し、大学進学につなげる生徒も出ている。一人ひとりに寄り添う教育が評価され、生徒募集や進学実績も好調。	**STEAMに宗教教育も加えた21世紀型の学び** ▶伝統的に取り組んできた5つの教育―5つの理科実験室を使った科学教育（S）、ものづくりとICTを融合した「技術」教育（T）、国際人の教養としての宗教教育（R）、ベルリッツメソッドを導入した語学教育（E）、作陶もするような本格的な芸術教育（A）、徹底的な数学教育（M）―を統合し、21世紀型の学びとして2021年、教育ビジョン「OLIVE STREAM」としてまとめて発信した結果、魅力が保護者や生徒に伝わりやすくなった。2022年度の志願者数は前年比で3割増え、入学者の学力も上がっている。取り組んで3年目。今後の出口（大学進学実績）の変化に期待。	**未来を織り込んだ学びがコンセプト** ▶「どんな未来がやってきても大丈夫」を合言葉に、卒業後も価値を持ち続ける未来を織り込んだ学びを提供。創造的思考を養うSTEAM教育、海外進学も視野に入れた英語教育、企業や大学との協働を含む経験学習重視の探究活動などを、それらにふさわしい施設、設備を整えたうえで実施。▶他方、受験対策は外部委託（系列校や塾）や、AIを使った個別最適化学習を導入し、教員は本校独自の教育に専念可能な環境も整備。▶一時、生徒募集に苦戦。これら教育改革により2年かけて半分に満たなかった定員充足率が、ほぼ充足レベルまで持ち直した。	**一般・年内の2way戦略で生徒募集好調** ▶北陸三県で唯一のキリスト教学校。▶共学化、模試の本格導入などの改革に2001年度から着手。2012年度にそれまでの3コースを、一般入試中心の「特別進学（5名から80名へ）」、推薦入試中心の「総合進学」の2コースに統合。「一般入試でも推薦入試でも大学進学できる」体制をアピールすると同時に、指定校推薦での進学指導を強化した。▶志願者数は100人台から600人台に、入学者数は80人台から300人台に、現役大学進学率は20%台から70%台に上昇。特に、2016年度より総合進学コースの大学進学率が60%を超えて以来、募集は好調。	**統合報告書で地域を知り探究活動** ▶瀬戸内市の後援の下、市の魅力発見、課題解決に取り組む地域学「セトリー」を、総合的な探究の時間に全学年で実施。2023年度は市が作成した統合報告書のレクチャーを職員から受けて、地域の課題や取り組みについての知識をつけ、地域について考える探究学習を行う。▶研究、発信に対する市の評価は高い。協働や発表活動による非認知能力の高まりが感じられ、年内入試、特にグループワークや模擬講義形式の入試に役立っている。生徒に企業や大学と話ができる力もついている。	**校訓変更、定期テスト廃止の大改革** ▶立候補教員による学校改革委員会が改革案を練り、2023年度に大改革を実施。生徒が自分が生きたいように生きられる力を身に付けることを理想とし、校訓を「自考自創」に変更。スクールポリシーの最上位目的は「誰一人取り残さず、自律し社会に貢献できる大人の育成」。20～30年後の未来を念頭にコース制を再編した。▶授業は単元ごとに個別／グループ／一斉など授業形式を変更。全教科で定期テストを廃止。6マインド（自信、向上、探究、受容、疎通、協調）の非認知能力を生徒が自己評価。知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度でバランスよく評価している。総合的な探究の時間を5単位（毎日）に引き上げ。
進路指導の方針、特徴	**85大学164学科という多様な進学先** ▶一人ひとりの志にマッチングする進学先、希望の研究ができる学科から大学を探す。中学・高校の6年間、そして卒業後のキャリアも考えて検討。その結果、進学先は85大学164学科と多様で、専門学校に進む生徒もいる。▶国公立大や難関私立大をめざす生徒が多いこともあり、現在は7割の生徒が一般選抜での合格校で進学。探究学習や入試の年内シフト傾向の影響もあり、今後は総合・推薦型選抜での進学者が増えると予想している。	**志望校検討は中学から始める** ▶進学先は首都圏の私大中心。英語検定上級取得者やビジコン、部活大会入賞者も多い。その実績を生かすよう勧め、年内入試利用者が5年間で約30人から70人に増加。海外大進学も拡大したい。▶高校卒業後の進路を中学から考えさせ、中3でオープンキャンパスに行かせる。▶保護者のニーズをくみ、医学志望者向けのメディカルプログラムを用意。医科系大学とも連携しながら、現役医師の講演会なども実施。	**探究学習の成果を入試に積極活用** ▶地域に産業もあり、人材を地産地消するエリア。よって保護者は県内進学志向が強い。▶以前は一般入試一辺倒で、せっかく探究学習に中学から取り組んでもその実績を使わず、一般で受験して不合格、やる気がなくなるパターンが多かった。今は年内入試の利用も勧める。学びの経験から決めた志望校に伴走する方針に転換し、結果、進学先は多様な進路が混在する八ヶ岳型に。	**校内選抜では4,500字のエントリー文を課す** ▶生徒の希望を重視。バイアスをかけない指導を心がけ、教員の価値観で生徒の進路を限定しない。▶アセスメントの受検結果、指定校推薦一覧、コース別合格者数などの情報を積極公開。▶年内入試でも競争意識を高める。指定校推薦の校内選抜では、大学への提出書類とは別に、志望理由、活動履歴、読書感想文等、計4,500字のエントリー文を課し、一人ずつ面接を経て校内で選抜、学校代表に育てる。	**生徒と大学の個性をふまえて指導** ▶国公立大学でも年内入試が増えているように、基礎学力＋非認知能力で進学する時代と捉え、年内入試重視。「セトリー」や部活動で鍛えた多面的な能力を、総合型、学校推薦型の選抜で見てもらう。▶年内入試対策は職人技。各大学が改革でめざしていることを知ったうえで、生徒一人ひとりのキャラクターに合わせた志望理由書の作成を指導している。	**将来像も実現のしかたも自分で考える** ▶「生徒を信じて待つ」ことが基本。探究の時間に、将来学びたい、就きたい分野を調べさせる。大学の教育や求める人材、就き方がわからない職業なども、生徒が自分で調べ、関係各所に聞くように指導。何をするために進学、就職するのかを早めに意識させたい。▶大学入試は年内入試がメインだが、5教科受験を支援する環境（兄弟校の放課後予備校への参加）も整えている。
新課程以降の生徒の変化	**地方国立大学にも目が向くように** ▶データサイエンスの基礎やプレゼンテーションを学び、議論や発表を行う授業「探究基礎」を中3で実施している。▶研究の内容を軸にした進学先選びがますます進み、理系志望者は地方国立大に目が向くようになった。**室蘭工業大学**、**九州工業大学**など、これまで実績のない大学にも進学者が出ている。	**自己変容をめざす探究学習を実施** ▶以前より中学段階から探究学習には取り組んでいて、さらなる進化をめざす。高校では2023年より各地で社会課題に取り組む人に会い、その熱量に触れて自己変容をするための「探究ツアー」を開始。理系の探究学習などは系列の**関東学院大学**などのサポートを得て実施。	**高大連携により探究のレベルが向上** ▶教科学習にも全面的に探究を取り入れている。**静岡大学**、**静岡県立大学**との連携によって大学に近いレベルの授業内容になることも。連携授業は高校側から各学部長に直にプレゼンテーションし、実現。授業で学んだ知識を生活に生かし、大学への進学理由に育てる。	**従前より教科学習以外の活動を重視** ▶キリスト教学校としてのボランティア活動が元々盛ん。▶2009年度より「勉強プラスもうひとつ」をモットーに生徒を活性化。その成果をレポート等で確認し、年内入試に活用もしてきた。課外活動も含めた総合的な教育という点では指導にも生徒にも大きな変化はない。教科における探究学習については、量と質の両立には困難さを感じている。	**新課程で中学での学力に変化の兆し** ▶旧課程も新課程も変わらず、ゴールは共通テストだと認識している高校が多い。学校が求めるものに変化がないので、生徒の変化もない。▶中学校では学習量が増え、生徒に変化が起きているかもしれない。人口減にもかかわらず本校入学者の学力は上がっているため、新課程により学力の底上げが生じた可能性がある。	**改革による主体性の高まりを感じる** ▶改革以降、授業中生徒が集中して学ぶ時間が増加。受動的な学習から自身の考えを深める学習へと変化。▶生徒は授業ごと、単元ごとに振り返りを行い、単元の振り返り時は学びや成長について具体的なエピソードを書いて提出する。▶主体的に考え、意見を述べることに喜びを感じる生徒が多い。
生徒に勧めたい注目の大学、大学への期待	**高校でできないことが大学はできる。共に高校の教育改革に取り組みたい** ▶本校の改革はまだ半ば。教育を一緒に変えようと協力してくれる大学に注目する。高大接続を通して中高の枠に捉われない学びの機会を生徒に提供することをめざしている。例えば協定校の**東京農業大学**とは、大学で中学生やその保護者も参加できる体験授業・模擬実験実習を実施し、女子生徒の理系進学への保護者の理解を促進。女性技術者育成をめざす**芝浦工業大学**とは高1、2生が研究室に数日間「配属」されるサマーインターンシップを実施、研究プログラム修了者用の学科限定特別選抜も始める。合格後、生徒は好きな研究を継続できるしくみ。▶大学での学びをベースにした進路選択を実現するために、研究室の情報を集めたい。	**熱心に訪問し情報提供する大学は好印象。校長室にも遠慮なく訪れてほしい** ▶本校の強みである理数、情報、リベラルアーツなどの分野を持つ大学に興味がある。▶**金沢工業大学**のようにまめに足を運んでくれる大学は、よいイメージを抱く。進路指導室だけでなく、校長室にも話しに来てほしい。▶以前は愛知県で勤務していたが、地方大学が地元のヒエラルキーを覆すのは難しいのが現実。特定の層に響く特色をつくり、他エリアの学生を集める戦略もあるのではないか。▶高大協定を結ぶと、指定校枠の存在に対する高校生や保護者の認知度がぐっと高まる。▶中高一貫校は中学から進学先を検討する。オープンキャンパスは中学生も対象にしてはどうか。本校では、小1から親子で参加可能だ。	**高校までにともした探究の火を、1年次から大きく育てるカリキュラムを** ▶中学から探究の芽を育て始め、高校でグループ研究や個人研究を行い…、と生徒にともった探究の火を大きくするのが大学であるはずなのに、研究形式の授業が高学年まで持ち越しでは、生徒の意欲が消えてしまう。1年次から自分のテーマを研究できるカリキュラムを望む。**静岡大学**とは、デジタルポートフォリオで個々の生徒の状況を把握できる質問のつくり方などを助言してもらっている▶研究ベースの大学選びという意味では、地方の国立大学に注目している。**静岡大学**はお茶の研究、防災教育など、調べると独自性のある研究が多い。大学はもっと広報しては？▶社会課題に挑戦させる実践的な学びが特徴の**静岡大学**のグローバル共創科学部には注目している。	**育成力を期待した大学選びが生徒の主流。エビデンスの公開を望む** ▶「自分を受け入れ育ててくれる」進学先を選ぶ生徒が多い。国立か私立か、大学か専門学校かという区分は、生徒の選択基準としてはあまり重要ではない。専門学校が母体で設置された大学は、知名度こそ低いものの、育てる力に長けていると感じる。医・歯・薬・保健系統の学部への進学が2～3割を占めるまで増えてきたが、これも資格志向というより、生徒が人材育成力を重視した結果ではないかと考える。▶大学には、自学が育成をめざしている力、育成方法、育成できているというエビデンスの明示を期待する。生徒にわかる形で説得力のある情報を示してもらえれば、関心を持つ生徒は増えるだろう。	**入試を通じて生徒に学習の目的意識を持たせてくれる大学を勧めたい** ▶**広島大学**「光り輝き入試」の学校推薦型における経済学部の実施方法は秀逸。第1次選考（書類、面接）に合格したうえで共通テストで基準点を取る必要があるが、第1次選考の合否は発表しない。生徒は最後までがんばるし、高校は2年次までに英語外部検定を取らせるなど、指導強化せざるを得ない。▶**IPU・環太平洋大学**。入試難易度は高くないものの、「4年後に責任をもつ大学」のスローガンどおり、スポーツで学生を集め、公務員と教員を中心に就職実績を出す大学という印象。高校教員が何にひかれるかを知っていて、中学校の体育教員○人、英語教員○人…と実数で成果をアピールしている。	**正課、正課外でプロジェクトに参加できる機会がある大学を評価** ▶プロジェクト型の授業を実施している大学が、生徒を成長させてくれると感じる。**広島経済大学**の「興動館教育プログラム」は、行動力や企画力などを養う科目と、国際交流、社会貢献などの実践がセットになっている。汎用的能力の伸長を振り返る点も本校と同じで、学んだことが生かせる。また正課外だが、**岡山大学**の「岡プロ！」（学生が自学をプロデュースするプロジェクト）は、クラブに所属しない学生向けの活動である点を評価している。▶年内入試が増える流れは歓迎。学校推薦型と総合型の趣旨が異なることは理解しているが、求める準備をなるべく共通にしてもらえると、生徒に挑戦させやすい。

取材・文／編集部、児山雄介